

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2522 号

Prognostic impact of extranodal extension in patients with pN1-N2 lung adenocarcinoma

病理病期 N1-N2 肺腺癌患者における節外浸潤が予後へ与える影響

野村 幸太郎 (のむら こうたろう)

博士 (医学)

論文内容の要旨

リンパ節転移は肺腺癌患者の重要な予後因子のひとつである。TNM 分類において、リンパ節転移は解剖学的な転移箇所のみで分類されているが、転移形式は考慮されていない。今回の研究の目的は、完全切除された肺腺癌患者のリンパ節転移巣の形態が予後に与える影響を明らかにすることである。2011 年から 2017 年に当院で原発性肺腺癌に対して完全切除が施行され、病理学的にリンパ節転移を認めた 168 例の患者を後方視に検討した。リンパ節転移巣の形態（転移腫瘍のサイズ、転移個数、壊死の有無、節外浸潤の有無）を病理学的に評価した。リンパ節転移巣の形態と臨床病理学的背景および患者の予後との関係を解析した。168 例のうち 80 例が病理学的 N1 であり、88 例が病理学的 N2 であった。複数個のリンパ節転移を認めた症例は N1 で 36 例(45%)、N2 で 77 例 (88%) であった。リンパ節内の腫瘍面積割合の中央値は N1 で 15% (範囲 0-85%)、N2 で 27% (範囲 0-90%) であり、リンパ節内の壊死面積割合の中央値は N1 で 0% (範囲 0-16%)、N2 で 0% (範囲 0-10%) であった。節外浸潤は N1 で 29 例(36%)、N2 で 57 例(65%)認められた。単変量解析では、N1 症例では原発巣の浸潤径、術後補助療法、リンパ節転移巣の節外浸潤が有意な予後因子であり、N2 症例では血管浸潤、胸膜浸潤、EGFR 遺伝子変異の有無、術後補助療法、リンパ節転移巣の節外浸潤が有意な予後因子であった。全ての臨床病理学的因子と比較した二変量解析では、リンパ節転移巣の節外浸潤は N1、N2 症例どちらにおいても全生存・無再発生存における予後不良因子であった。完全切除された、リンパ節転移を伴う肺腺癌患者において、リンパ節転移巣の節外浸潤の有無は重要な予後因子であった。